

オレ様御曹司の溺愛宣言

プロローグ 出会はビール片手に

ビール片手にオフィスの廊下を歩いていた栗城瑞穂は、窓を叩く風の音に足を止める。窓の下へと目をやると、花を咲かせたばかりの桜の枝が大きくしなっているのが見えた。

宵闇の中、外灯の明かりに浮かぶ桜の枝があまりに激しく揺れているので、せっかくの花が飛ばされてしまうのではないかと不安になる。

どうか散りませんように。そう祈って桜を眺めていると、声をかけられた。

「あれ、先輩。まだ仕事してたんですか？」

振り向くと同じ営業部の後輩、宮下杏奈が立っていた。

「ああ、お疲れ」

「昼に会った時、社長のお供で会食に行くって言ってませんでした？」

「その予定だったんだけど、急な来客の予定が入ったとかで中止になったの。だから溜まった事務仕事してた」

瑞穂は、手にしたビールの缶を軽く振る。

本来なら職場に相応しくない品だが、ビール製造会社であるリーフルワリーに勤める瑞穂にとって、これは大事な商品だ。

とくに今手にしている商品には、特別な思い入れがある。

「そうなんですか。せっかく美味しいもの食べるチャンスだったのに、残念ですね」

同情する杏奈に、瑞穂は「どっちも仕事よ」と、肩をすくめてみせた。

「社長のお供で食事に行くのも、書類整理も、仕事としての価値は同じ。宮下こそ、営業に出てそのまま直帰したのかと思ってた」

瑞穂は今日、社内をあちこち動き回っていたので、同じ部署にいる杏奈とはすれ違いになっていた。行動を確認したわけではないが、昼以降に顔を見た記憶がないので、そう判断していた。

「そのつもりだったんですけど、忘れ物して……せつかくだから、もう一件、営業に寄ってから帰ります」

「お疲れ様」

労をねぎらう瑞穂のかたわらに、杏奈が歩み寄ってきた。

そのまま瑞穂の視線の先を確かめるように、窓の外を眺める。

「外、風がすごかったですよ」

大きくしなる枝を見て杏奈が言う。肩に軽く触れるショートボブの髪を指で梳きながら「おかげでばさばさですよ」と、笑った。

「そうみたいね。だから、桜が散ってしまわないか心配で」

「桜は五分咲きを過ぎないと、花が散らないって言うから、大丈夫だと思いますよ」

三月下旬の今日、例年より少し遅めの開花宣言がされた桜はまだ三分も咲いていない。

それなら、この強風で花が飛ばされることはないだろう。

「そう。よかった」

瑞穂がホッと息を吐くと、隣の杏奈が小さく笑った。

「仕事人間の先輩でも、桜の花が散るのは悲しいですか？」

どこかからかいを含んだ杏奈の指摘に、瑞穂はキョトンとし、真面目な表情で頷いた。そして持っている缶の表面を愛おしげに撫でる。

「当たり前でしょ。お花見シーズンの前に桜が散ったら、ビールが売れないじゃない」

ただでさえ昨今の飲酒業界で、ビールは第三のビールやアルコール度数の低い酎ハイ系に押されて人気低迷している。

花見や歓送迎会など飲酒の機会が増える時期には、是非とも売り上げを伸ばしたい。だからこそ、桜には頑張っただけでも長く咲いてもらわなくては困る。

できることなら、ちょうど週末に冷えたビールが恋しくなるくらい暑くなり、そのタイミングで満開の花を咲かせてくれたらなによりだ。

それは、ビール製造会社の社員として、当然の願いではないか。

滔々と持論を述べる瑞穂に、杏奈が「先輩らしいです」と、クスクス笑う。そして小さく肩をくめて付け足した。

「でも、残念です」

「残念？」

「一瞬、先輩にも桜を愛でる風情の心があるのかと期待しました」

ありえないとばかりに、今度は瑞穂が大袈裟に肩をすくめる。

「春夏秋冬、放っておいても季節は巡るのよ。そんなもの愛でる暇があるなら、仕事をするわ。季節は勝手に巡るけど、商品は私たちが頑張らないと、お客様の手元に届かないんだから」

迷いのない瑞穂の言葉に、杏奈が呆れた顔をした。

「相変わらず、仕事第一主義ですね。せっかく美人なのに勿体ない」

「どこが」

「だって色白で鼻筋が通ってるし、目もハッキリした綺麗な二重で、もっとバッチリメイクしてお酒落すれば、絶対にモテますよ！」

杏奈の言葉を鼻で笑いつつ、瑞穂は窓ガラスに映る自分の姿を見た。

そこには、切りそびれて長くなった前髪をヘアピンで留め、切れ長で冷たい印象を与える目元を眼鏡で誤魔化したキャリアウーマンの姿があるだけだ。

女子としての甘さも可愛げもない代わりに、仕事に誇りを持ち、胸を張って働く自分を瑞穂は嫌

いではなかった。

杏奈の言う可愛いメイクが駄目とは思わないけど、自分には絶対に似合わない。瑞穂には今の自分がしっくりくるのだ。

他人の目を気にすることなく、自分らしく生きていけるのは幸せなことだ。

「人それぞれ、その人に合った生き方があるわ。私には、この生き方がちょうどいいの」

そう断言する瑞穂に、杏奈はもう一度「残念です」と、肩を落とした。

「でももし気が変わったら、私に相談してくださいね。女子力の上げ方を伝授しますから」

「ハイハイ、ありがと。気を付けて帰ってね」

そんな日は一生来ないだろう。そう思いつつ、杏奈を見送った瑞穂は、手にしてるビールを目の高さまで待ち上げた。

薄い黄金色の缶の上下に、簡略化された鮮やかな緑色のホップと若葉の絵が描かれ、その間に二羽のうさぎがじゃれ合うように跳ねている。

働く女性のご褒美ビールというコンセプトのもとデザインされた図柄は、女性の頬が思わず緩む愛らしいデザインとなっている。さらに缶の表面にざらりとした加工をすることで、独特の手触りを生み出していた。

是非、仕事で疲れた体と心を、このビールでいやしてほしいものだ。

ゴールデンウィークに照準を合わせ数年かけて商品化にこぎつけた品は、味や香りも、ご褒美と

いう言葉に相応しい仕上がりとなっている。

膨大な手間暇をかけ、何人ものスタッフによって作り上げられた最高の商品。それをたくさんの人に知ってもらい、手にとってもらえるよう働きかけるのが、瑞穂たち営業部の仕事だ。

営業は大事な仕事だし、やりがいを感じているが、できればいつか作り手の側にも回ってみたいという夢もあった。

「なんてね……」

今は任された仕事をきっちり遂行することが最優先事項だ。

瑞穂は軽く宙に放った缶をしつかり受け止めて、営業部のオフィスに向かった。

しかし、オフィスに入った瞬間、瑞穂の足が止まる。

——誰……？

オフィス内に、しかも瑞穂のデスクの前に見知らぬ男が立っていた。

長身で肩幅が広く、遠目にも上質なスーツを着ていることがわかる。背筋を伸ばし、左手をズボンのポケットに突っ込んだまま右手で書類を持つその後ろ姿から、なんだかひどくキザな印象を受けた。

瑞穂の所属する営業部だけでなくリーフルワリー社内に、こんなキザな後ろ姿の人はいない。

——もしかして、産業スパイっ!?

瑞穂の脳裏に、ぱつとその言葉が閃く。

デスクに出しておいた書類は、すでに稼働し始めているプロジェクトに関するものなので、盗まれても大きな支障はない。だが、もし本当にそうなら、ここで逃がすわけにはいかない。

他の人を呼びに行っている間に、逃げられてはことだ。

瑞穂は頭の中で、素早くそう結論つける。

咄嗟に、なにか武器になるものはないかと周囲に視線を向けて、自分の手に缶ビールが握られているのに気付く。

——大事なサンプルだけ……

産業スパイを捕らえるための、武器として役立っていたらどう。

これまた素早く考えをまとめた瑞穂は、足音を忍ばせゆっくりと男の背後へと歩み寄った。

背後からそつと窺うと、男はまさに今瑞穂が手にしている新商品に関する書類を読んでいた。

——間違いない。産業スパイだ!

そう確信するけれど、さすがにいきなり殴りかかるわけにはいかない。

そこで瑞穂が缶ビールを持った右手を上げつつ「あの……」と、声をかけると、男が勢いよく振り返った。

振り向きざまに男が足の位置を変えたせいで、予想以上に相手の体が瑞穂に近づく。殴りかかるには近すぎる距離に迫った男の体から、深みのあるトワレの香りが漂う。

慣れない上品な男の匂いに瑞穂がひるんでいると、男に右手首を捕らえられた。

「……っ！」

焦る瑞穂がバランスを崩して倒れそうになると、男はすかさず右手を瑞穂の腰に回して体を支えてくれた。その拍子に、彼が手にしていた書類が床に落ち、パサリと乾いた音を立てる。

突然のことに硬直する瑞穂を気にすることなく、男は瑞穂の握る缶ビールを観察しながら口を開いた。

「威勢がいいね」

瑞穂が体勢を立て直したのを確認して、男は腰に回している手を離したが、右手は捕らえたまままだ。

「……」

どうにか手を振り解こうともがく瑞穂に構うことなく、彼はいろんな角度から彼女の握りしめる缶を観察する。

「なるほど。これが新商品ってわけか」

思う存分缶を観察した彼は、視線を瑞穂に向けた。

そして意味深な笑みを浮かべて「で、君はこれが売れると思う？」と、問いかけてくる。

「売れますっ！」

気持ちより先に口が動いた。瑞穂は笑みを浮かべる男を威嚇するように睨みつける。

「離してください。警察を呼びますよ」

「ん？」

瑞穂の発言に、男性は不思議そうに眉を動かした。

「貴方が読んでいたのは、我が社の新商品販売に関する重要情報です。部外者が勝手に目を通していいものではありません」

声が震えないよう注意しながら、瑞穂は男を睨んだまま言葉を続ける。

「そもそも許可なくオフィスに入り込んでいる時点で不法侵入です。もし貴方が、違法な手段により入手したその情報をライバル企業に漏洩するようならば、営業秘密侵害として訴えます。まずは名を名乗りなさい」

この男が、努力することなくこそこそ会社の資料を漁り、卑怯な手段で利益を上げる産業スパイなら許すわけにはいかない。

毅然とした態度を見せる瑞穂の姿に、男性が納得したように頷く。

「ああ、ごめん。俺は……」

「千賀観さんっ！」

その時、彼の言葉を遮るように、瑞穂のよく知る名前を口にする声が聞こえた。

振り向くと、瑞穂の伯父であり、このリーフブルワリーの社長である栗城平助が、青ざめた表情で駆け寄ってくる。

——千賀観？

「千賀観」とは、このリーフブルワリーの親会社であるセンガホールディングスの社長の苗字ではないか。

だが瑞穂の知る千賀観社長は、選暦どころか古希も過ぎていそうな老紳士だ。社内報などで見かけたことのある千賀観社長の顔を思い出しながら、改めて自分の手首を握る男の顔を見つめた。

形よく整えられている眉に、意志の強さを感じる。その下の二重の目は、どこか野性的な荒々しさと力強さがあつた。

少し薄い唇と、鼻筋の通った高い鼻も、彼の容姿の良さを引き立てている。モデル並みに端正な顔立ちをしていながら、ひどく挑戦的な印象を受けた。

「瑞穂、千賀観さんに失礼だぞ。早く手を離さないかっ！」

ぽかんとして男の顔を見上げていると、駆け寄ってきた平助に強く叱責される。手を掴んでいるのは、彼の方なのに。

「伯父さん……」

普段は公私の区別をハッキリさせている瑞穂だが、戸惑いからつい慣れ親しんだ呼び方をしてしまう。そんな瑞穂に、「伯父さん？」と、呟いた男が掴んでいた手を離れた。

「失礼」

口角を上げて瑞穂に謝罪した男は、蒼白な顔をする平助に顔を向ける。

「少しオフィスを見学していたら、彼女が新商品のサンプルを見せてくれたんです」

「そう、でしたか……」

なんだかこの状況と彼の説明が微妙に違うが、平助はホッとした顔を見せた。

「ご連絡をいただき、お待ちしておりました。もっと早く教えていただければ、娘の梨香も一緒に挨拶をさせていただきましたのに」

梨香とは、瑞穂と同じ年の従姉妹で、同じくこのリーフブルワリーで働いている。ただし見た目も性格も、仕事一筋の瑞穂とは真逆のタイプだ。

「申し訳ない。急に時間が空いたもので。下見を兼ねて、栗城社長にご挨拶をしたいと思いまして」

なるほど。今日の会食予定が急に変更になったのは、彼を待つためだったのか。

そう納得していた瑞穂に、千賀観と呼ばれた男が視線を向け右手を差し出してくる。

「改めて。千賀観慶斗と言います」

「千賀観さん……」

つい苗字に反応してしまう瑞穂に、平助が「千賀観社長のお孫さんだ」と、耳打ちしてきた。

——社長の孫……

だとしたら、平助の過剰反応も理解できる。でも、それならそれで、どうして千賀観社長の孫がここにいるのかわからない。

センガホールディングスといえば、飲料事業を中心にサプリメントや食品の製造販売をする大企業だ。さらに現在では、保険代理、不動産業、商業施設の運営など多角経営を行っている。リーフブルワリーは、センガホールディングスの飲料事業を担う子会社の一つだ。

社長を務める平助には悪いが、リーフブルワリーはセンガホールディングスの末端企業。創業者一族の子息が、わざわざ挨拶のために訪問する理由が思いつかない。

納得がいかないまま瑞穂が差し出された手を握ると、これからよろしくと微笑まれた。

「はい？」

「まだ内々の話だが、千賀観さんは四月から我が社に出向することになっているんだ」

怪訝な顔をする瑞穂に、平助が説明する。

「出向……ですか？」

「社長の判断です。系列会社に出向き社会を学ぶようにと。世間知らずの若輩者ですが、お役に立てるよう努力します」

にこやかに話す慶斗の瞳に、強い野心を感じる。

——学びにくるっていうより、社長の伯父さんに取って代わりそうだ。

慶斗の真意を探るようにじっと見つめていると、平助がとんでもないと首を横に振る。

「なにを仰いますか。千賀観さんの手腕を見込んだ社長が直々に、近年売り上げが低迷してる我が社の業績立て直しを任せられたではありませんか。千賀観さんが次期社長候補と噂されているの

は、皆が承知していることです」

平助の言葉を否定せず、慶斗は目を伏せる。

その姿に、伯父の言葉がただの社交辞令ではないと思った。

——なるほど……

社長直々の命により、リーフブルワリーの業績立て直しのため本社から出向してくる慶斗。

しかも社長の孫で次期社長と噂のある王子様とくれば、伯父が自身の予定を変えてまで丁重に扱うのも納得がいく。

平助は何度も頭を下げながら早口に瑞穂が自分の姪であり、営業部で仕事をしていることを説明した。

——だからって……伯父さん、腰が低すぎる。

平助に気付かれないよう小さく息を漏らすと、慶斗と目が合ってしまった。

慶斗は真面目な顔をして、瑞穂に問いかけてくる。

「ところで、さっきの話の続きだけど、君はそのビールが売れると思う？」

慶斗が試すような視線を瑞穂の持つ缶ビールに向けてきた。

新商品が端から売れないと決めつけているみたいな彼の視線にムツとする。

「売れます。私たち営業が、必ず売ってみせます」

「凛々しいね」

断言する瑞穂に慶斗が微笑み、視線を平助へと移す。

「いい社員をお持ちだ。自社の商品に自信を持ち、強気で勝負に出られる営業は、会社の財産ですよ」

「ええ。この栗城は、仕事熱心で、若いながらも弊社の売り上げ向上に貢献しており……」

慶斗の機嫌を損ねたくないのか、平助は素早く彼の意見に賛同し瑞穂を褒める。

「ご機嫌取りに徹する社長の下に向向してきたところで、彼に一体なにが学べるのだろうか。そんなことを思いつつ慶斗を見ると、彼も同じタイミングで瑞穂を見てきた。視線が合った慶斗が、茶目っ気のある表情を見せて言う。

「頼りになる、武闘派の営業ですね」

「ん？ 武闘派？」

不思議そうに首をかしげる平助の横で、瑞穂が顔をしかめる。

いざという時は缶で殴ろうとしていたことに、気付かれていたらしい。

でも彼の正体を知らなかったあの状況では、警戒しても仕方ないと思う。

「貴方が何者かは承知しました。しかし、いくら訪問の約束があったとはいえ、まだ弊社の社員でない以上、勝手に社内を散策し、許可なく人のデスクにある資料を読むのはいかなものかと思いません」

殴らなくてよかったとは思うが、そもそも彼が一人で勝手に社内を散策したりせず、平助の案内

を受けていれば誤解は生じなかったのだ。

それなのに、からかいまじりに「武闘派の営業」と呼ばれることには、納得がいかない。

相手の正体を知ってなお、毅然とした態度を取る瑞穂の隣で平助がみるみる青ざめる。

「瑞穂っ、……しっ、失礼だろう……っ」

平助は青い顔で口をパクパクさせていた。

対する慶斗は一瞬目を丸くした後、すぐに真面目な表情をして瑞穂を見る。

「なるほど。失礼した。……君の営業成績は、きつとその真摯な態度に信頼が寄せられているからだろうね」

「……」

怒られるかと思つたのに、あっさり謝られると拍子抜けしてしまう。

その思いのまま彼の表情を窺うと、これで満足かいと問うように微笑みかけられた。

——なんか偉そう……

彼が身に纏う雰囲気の違いか、謝罪の言葉を口にされてもどこか高圧的なものを感じてしまう。

でも謝られた以上、瑞穂が彼に言うことはもうない。

そんな瑞穂の心を読み取ったみたいに、再び慶斗が右手を差し出してくる。

「では、改めて四月からよろしく」

瑞穂はこちらに差し出された、指の長い大きな手を握り返す。

「こちらこそよろしく願います」

瑞穂がそう挨拶をすると、慶斗がニヤリと強気な表情を見せた。

——王子様って言うより、冒険家みたい……

彼の眼差しは強く、一切の迷いがなかった。

この王子様は、世間知らずのお坊ちゃんという甘やかされた存在ではないだろう。

——まあ、仕事ができるなら、なんでもいいけど。

彼がセンガホールディングスの創業者一族かどうかなんて関係ない。

仕事のできる人が来てくれるのであれば、出向だろうと新人だろうと大歓迎だ。

そんなことを考えながら、瑞穂は彼の手を離れた。

1 一目惚れから始まる関係

金曜日の午後。外回りを終えた瑞穂がリーフブルーワリー本社のある総合オフィスビルに入ろうとした時、鞆かぼの中でスマホが鳴った。

見ると、商品開発部主任である峯崎保みねざき たもつからのメールだ。

働く女子のご褒美ほうびビールをコンセプトにした新商品売り出しのため、少し前まで彼とはママに連絡を取り合っていたが、発売日を過ぎて半月ほど経ってからのメールに、何かとメールを開く。内容は、新商品の滑り出しが好調であることへのお礼だった。

普段は職人気質で寡黙かもくな彼のお褒めおほめの言葉に、つい頬が緩ゆるんでしまう。

今回の新作ビール発売に向けて、瑞穂はかなり早い段階から営業の領域を超えて関わらせてもらっていた。以前から峯崎と面識があったこともあり、働く女子の一人として意見を求められたからだ。

お互いの意見を出し合い、なにもないところから一つの商品を形にしていくという作業は、大変だったけれど学ぶことも多く楽しかった。

そんなことを思い出しつつメールを読み進めていくと、瑞穂の意見が随分参考になったから商品

開発部に異動させてほしいと社長に打診したが断られた、という言葉で締めくくられていた。

もちろんお世辞なのだろうけど、職人気質で仕事に厳しい峯崎に、ここまで言われるのは悪い気はしない。

——また、あんな仕事ができたらいいな……

峯崎は、瑞穂たち営業部が売り込みに尽力してくれたおかげでビールが売れたと、メールに書いてきた。でも瑞穂からしてみれば、美味しいと自信を持って売り込める商品を託してもらえたことを感謝している。

スマホ片手に頬を緩めていると、聞き慣れた声が聞こえてきた。顔を上げると、杏奈がオフィスビルから出てくるのが見える。

「お疲れ。今から外回り？」

スマホを鞆かばんにしまい、瑞穂が軽く手を挙げた。

「先輩、おかえりなさい」

駆け寄ってくる杏奈の笑顔が、心なしいつもより輝いて見える。

それを証明するように、杏奈が弾んだ声で言う。

「聞いてくださいよ！ さっき、廊下で王子様とすれ違ったんです」

「ああ……」

その一言で、全てが理解できた。

四月に本社から出向してきた千賀観慶斗は、長身で端正なルックスと、センガホールディングス社長の孫で次期社長候補という肩書きから、女子社員の間では密かに「王子様」と、呼ばれている。瑞穂ですら初対面の際、咄嗟とつさに「王子様」という言葉が思い浮かんだくらいだ。

「近くにいくと、すごくいい匂いがあるんです」

嬉々とした表情で話す杏奈だが、すぐにむくれた表情をして不満を零す。

「でもいつも梨香さんが隣にいて、王子様に話しかけるチャンスもないんですよ。自分の娘を千賀観さんのサポート役に付けて、それ以外の社員は男性ばかりって、社長の魂胆見え見えます。千賀観さんが梨香さんを気に入るように仕向けて、自分の娘を玉の輿こしに……って思ってるんですよ」

「まさか。社長には、社長なりの考えがあるんじゃない」

杏奈の意見に、つい頬が引き曇る。

社員の前で平助がその迷惑を口にすることはさすがにないが、身内の瑞穂にははつきりとそれを口にしていた。

平助としては、娘の梨香がセンガホールディングス創業者一族と姻戚関係になることで、自身の生活も、リーフブルワリーの経営も安泰になると考えているらしい。

「ズルいなあ……私だってそこそこ可愛いし、仕事だって梨香さんよりできるから、王子様と一緒に仕事すれば、チャンスがあると思うんですよ」

唇を尖らせて愚痴る杏奈は、確かに女性としての愛らしさがある。

恋愛に興味のない瑞穂としては、誰が王子様こと慶斗のサポート役に就こうがどうでもいいが、お伽噺のような恋愛に憧れている杏奈には重要な問題らしい。

——みんな、会社になにしに來てるのよ……

「とりあえず業務中は、仕事を頑張りなさい。そうしたら仕事の神様が、ご褒美に宮下のためだけの王子様に巡り会わせてくれるわよ」

冗談まじりにそう励ますと、彼女は大笑姿に目を見開く。

「それは間違いなく嘘ですね」

「……？」

瑞穂の意見を即座に全否定した杏奈は、からかいの表情を浮かべて言う。

「だって、仕事を頑張っていれば素敵な王子様に会えるなら、先輩はとくに最上級の王子様と出会っているはずですよ」

「……なるほど」

自他共に認めるワーカホリックの瑞穂が、恋愛の「れ」の字もなく、二十八歳の今日まで来ているのだから、彼女の説に信憑性があるわけがない。

「まあ、王子様と出会えなくても、いい仕事をすると気分がいいわよ」

仕方なく、そう言い換えた。

「どうせなら、そのついでに素敵な王子様と出会って、素敵な恋愛もしたいですよ」

「残念ながら、世の中そんなに都合よくできていないわよ」

瑞穂が指をひらひらさせると、杏奈が口をへの字に歪める。しかしすぐに表情を改め、「じゃあ、営業行つてきます」と、出かけて行つた。

その背中を見送つた瑞穂がふと視線を上げると、歩道に植えられている桜が青々とした若葉を茂らせている。

千雅観慶斗と初めて会った時、まだ咲き始めた桜は、いつの間にか葉桜になっている。木漏れ日に目を細めた瑞穂は、そのままビルに入った。

リーブルワリーは、十六階建てのオフィスビルの十階と十一階フロアを借り切っている。

営業部のある十階でエレベーターを降り廊下を歩いていると、従姉妹の梨香が休憩室から顔を覗かせた。

瑞穂と同じ年だが、緩いパーマをかけた髪を片側に流し、服装もメイクも全体的に甘い色使いを好む梨香は、スーツ姿の瑞穂よりずっと若く見える。

「瑞穂っ、ちょっと」

「……？」

休憩室のドアの間から顔だけ覗かせ、梨香が忙しなく手招きをしてくる。

何事かと思いつつ近付くと、手首を掴まれ休憩室に引きずり込まれてしまった。

梨香はドアを閉めるなり、声を潜めて言う。

「レイクタウンの再開発って、どんな感じ？」

「はい？」

あまりに抽象的な問いかけに、梨香がなにを言いたいのかわからない。

キョトンとする瑞穂に、梨香が唇を尖らせる。

「もう意地悪しないで教えてよ。レイクタウンの再開発ってどうなの？」

「どうなのって……」

梨香の言うレイクタウンとは、センガホールディングスが管理運営する都内にある複合型商業施設で、現在、周辺の再開発事業に合わせて建て替え工事を行っている場所だ。

レイクタウン内にリーフブルワリーの商品を扱うバーを開店する予定になっており、千賀観慶斗はその陣頭指揮を取るという名目で出向してきている。

「レイクタウンの狙いつてなに？」

焦れたように梨香が聞いてくる。

「狙いつて、周辺地域の再開発に伴う世代の変化に合わせたニーズ変換じゃないの？」

瑞穂の言葉に、梨香が難しい顔をする。

「そうじゃなくて、どんな料理を出したらいいの？ 静岡じゃダメ？」

「はい？」

話が飛びすぎている。

詳しい説明を求める瑞穂に、梨香が言う。

「ウチ、本社は東京だけど、工場は静岡にあるじゃない。だからリーフブルワリーのバーを造るなら、静岡地産の食べ物メニューに入れたらどうかって提案したの。そうしたら、千賀観さんに『そもそもそのコンセプトが違う』って言われたのよ。今、地方のアンテナショップとか人気あるからいいと思ったのに」

「ああ……」

慶斗が言った「コンセプト」とは、レイクタウンのコンセプトではなく、リーフブルワリーのコンセプトに関してだろう。

——社長の娘がこれでもいいのか……

どうしたものかと思いつつ、瑞穂が説明をする。

「梨香、今さらだけど、ウチは工場が静岡にあるけど、静岡のご当地ビールを造っているわけではないの。千賀観さんが言っているのは、そういうことだと思うよ」

一九九四年の規制緩和によって、ビール醸造免許取得に必要な年間最低製造量が大幅に下がった。その結果、小規模事業者を中心に数多くのクラフトビールメーカーが生まれた。

そんな中、リーフブルワリーは「職人が製法にこだわり抜いた国産ビール」をコンセプトに立ち上げられた会社だ。

静岡に工場が建てられたのは、ビール造りにおける環境や様々な条件を考えた結果にすぎない。

しかし、瑞穂の説明に梨香はまだ納得のいつていない顔をした。

「でも静岡で造ってるんですよ」

自分の意見を否定されたのが悔しいのか、梨香が唇を尖らせる。

「この場合、商品の製造場所ではなく、店に置くビールに合った料理を提案するべきなんじゃない？ そのためには、集客が見込める年齢層や性別を考慮して……」

「例えば？」

スマホを取り出し、瑞穂の意見をそのままメモしようとする梨香を、「自分で考えなさい」と、窘める。

「えーえ、ケチ。また的外れなこと言ったら恥ずかしいから、答え教えてよ。週明けにはまたミーティングがあるの。それまでに千賀観さんに頼まれた資料作りもあるし、忙しくて考える暇なんてないんだから」

可愛く頬を膨らませ抗議する梨香だが、自分で探した資料でアイデアをまとめなくては本人の成長に繋がらない。なので瑞穂は、これ以上のアドバイスをする気はない。

「とりあえず、私が今言ったことを参考に、自分の意見をまとめてみて。それから他の人と意見を出し合っていけば、相乗効果でいいプランがまとまると思うよ」

自分と違う視点を持った人の意見は、とても参考になる。梨香が自分の視点でまとめたアイディ

アは、たとえ的外れでも参考になるものはあるはずだ。

そう励ます瑞穂に、梨香が盛大に抗議する。

「私が一番いい意見を出さないと、目立てないじゃない！」

「別に目立つ必要はないでしょ……」

大事なのは、チームが一丸となってプロジェクトを成功させることだ。

そう諭すと、梨香は「全然わかってないわ」と、首を横に振る。

「大事なのは、千賀観さんに仕事ができる子だと思ってもらうことよ。そうすれば、そのご褒美に食事に誘ってもらったりして、個人的なお付き合いに発展させやすいじゃない」

一瞬、なにやら空想にふけた梨香がガッツポーズを作る。

子供の頃から「王子様のような、カッコいいお金持ちと結婚する」と宣言し、恋人ができる度に夢物語のような未来予想図を熱く語ってきた梨香のことだ。この一瞬の間に、慶斗との結婚に至る壮大なラブストーリーでも想像していたに違いない。

同世代にも既婚者がちらほら増え始めたこの頃、彼女のシンデレラストーリーという名の妄想に拍車がかかっている気がする。

——その意欲を仕事に生かせばいいのに……

その方がここで瑞穂を待ち伏せして意見を聞くより、よっぽど慶斗に認めてもらえる確率が上がると思うのだが。

「とりあえず、仕事頑張つてね」

瑞穂は、まだなにか話そうとしていた梨香を残して休憩室を出た。

オフィスに戻ると、立ったままの姿勢で男性社員と話し込む慶斗の姿が見えた。

彼は左手に持った資料に視線を落とし、右手の拳を唇に添えてなにかを考えている。年は三十六歳と聞いているが、実に仕事のできる男然としていて、つい視線がいつてしまう。

——住む世界が違うって感じ……

自分と慶斗では、同じ空間にいても存在している世界が違うような気がしてくる。

もっとも部署が違うので、基本的に関わることはないし、わざわざ関わりたいとも思わない。だが、他の社員は違うようだ。

見渡せば女性社員だけでなく、男性社員の中にも、チラチラと慶斗の様子を窺う姿が見られる。これが、創業者一族が持つカリスマ性というやつなのだろうか。

それとも人間の目というものは、自然と美しいものを求めるようにできているのか。

千賀観慶斗に磁力でもあるのかと思うほど、周囲の視線が彼へと集まっていく。

——王子様は、男にも女にもモテモテね。

最初こそ創業家のお坊ちゃんを値踏みするみたいな態度で出迎えた男性社員たちも、この一ヶ月ちよつとの間に、すっかり彼に一目置くようになっていた。

瑞穂には、自分の外見の麗しさを重々承知した上で、大いに活用している計算高いイケメンにしか見えないのだが。

初対面の日、学ばせていただきますと謙虚な台詞を口にしていた彼だが、一目見た時から、世間知らずのお坊ちゃんという甘えた存在ではないと思っていた。

瑞穂のその予想は当たっていたらしい。

書類片手に話し合っていた慶斗が、スタッフを引き連れオフィスを出ていく。その姿を見送りつつ自分のデスクに向かうと、その姿に気付いた営業部長が手を挙げる。

「栗城君っ」

営業部長がスマホ片手に瑞穂の名前を呼ぶ。

その表情が深刻で、デスクまでのほんの数歩の足取りを速めた。

「アメリカに向いているスタッフから、会場に荷物が届いていないって連絡が入った。出荷の履歴を追えるか？」

部長の一言で、一気に血の気が引く。

アメリカのスタッフとは、リーフブルリーの新たな市場を開拓すべく、海外の展示会を順に回っている社員のことだ。

「電話代わります」

瑞穂の言葉に、部長が素早くスマホを差し出してきた。

それを左手で受け取り、右手で自分のデスクのファイルを取り出す。

「お電話代わりました。栗城です」

そう話しながら、瑞穂は展示会の開催地の住所を確認する。

スタッフが伝えてくる会場の所在地と、出荷表の住所に違いはない。だとしたら荷物がどこかに紛れてしまったのだろう。

展示会は明日だ。カレンダーに視線を向けつつ、アメリカとの時差を計算する。

「まだ時間があるから大丈夫よ。すぐに確認して対応策を考えるから、とりあえず設営の準備を進めていて。大丈夫、必ず間に合わせるから」

その一言で、電話の向こうのスタッフがホッと安堵するのを感じた。

——言ったからには実行するしかない。

スマホを部長に返した瑞穂は、すぐに自分のスマホを取り出し、輸出を任せた運送会社に電話をかけた。そして事情を説明し、折り返しの電話を待つ間に、最悪荷物が見つからなかった場合の対応策を考える。

数こそ少量だが、アメリカに住む日本人オーナーの店にリーフルワリーの商品を輸出販売していた。そこに電話をかけ、商品を回してもらえないか交渉してみよう。

送った商品の中には、発売されたばかりの新商品も含まれていた。それを展示会で紹介できないのは痛い、商品棚を空にしておくよりよっぽどいい。

——なるべくなら、送った商品が見つかって欲しいけど。

早く運送会社からの連絡が来ますように。そう祈りつつパソコンを開き、今回の展示会場になるべく近い販売先を検索する。

目星を付けた店舗に電話をかけて事情を説明し、いざという時に商品を譲ってもらう確約を取った。展示会場までの距離と輸送ルートを確認して、輸送に要する時間を計算する。そこから、運送業者の回答を待てる時間を逆算し、決断のタイミングを決めた。

「よし……」

今の段階で、できることはここまでだ。

瑞穂が手早く段取りを部長に報告すると、判断を一任された。

それを了承した後、ただ折り返しの電話を待つだけでは時間の無駄と判断し、瑞穂は通常業務に戻る。

「冷静だな」

パソコンにデータを入力していると、頭上から声が降ってきた。

顔を上げると、一連の流れを見ていた同僚の市ヶ谷徹が立っていた。自分を見下ろす彼の視線に、どこか苛立ちを感じる。

営業成績が瑞穂に劣ることを気にしている彼は、普段瑞穂との関わりを極力避けている。だからこうして、彼の方から話しかけてくるのは珍しいことだった。

「……？」

「もっと、焦るかと思った」

そう言われて、瑞穂が肩をすくめる。

「焦ったところで商品が出てこなければ、そんなの時間と精神を無駄に消費するだけじゃない」

「……お前らしいよ」

市ヶ谷が瑞穂の動作を真似るように、肩をすくめて言う。

「いつも冷静で、判断も迅速。問題が起きた時のリスクヘッジも欠かさない。だから、愛想が悪くても、営業成績がいいんだろうな。……社長も部長も、お前のこと頼りにしてるみたいだし」

褒められているというより、皮肉に感じる。

それでも一応「どうも」と、頭を下げておく。

そんな瑞穂の態度に、市ヶ谷が口の端を意地悪く歪めた。

「女としての可愛げはないから、長い目で見れば損だけだな」

精一杯頭を捻って、絞り出した嫌味がそれか。

そんな面白くもない嫌味を絞り出す時間があるなら、仕事をすればいいのに。

「今損してないなら、問題ないでしょ」

そう言い返し、再びパソコンに視線を向ける。

まだなにか言い足りないのか、しばらくかたわらに立っていた市ヶ谷に構わず、黙々と作業を続

ける。そんな瑞穂に彼は「従姉妹と大違いだな」と吐き捨て、自分のデスクに引き返していった。

——もはや言われすぎて、挨拶ぐらいにしか感じないだけだね。

仕事は効率的で確実だけど愛想のない瑞穂より、可愛らしく人に甘えるのが上手な梨香の方が男性に評判がいいというのは承知している。

瑞穂としては、それは梨香と自分の得意分野の違いに過ぎず、特別コンプレックスを抱く問題ではない。そう思っているのに、時々その違いを、さも瑞穂の欠点であるような言い方をしてくる人がいる。

——人は人。自分は自分。

そうは思っているのだが、もし自分に梨香のような社交性があれば、傷付けずに済んだ人がいるのかもしれないと思うと、心の奥に燻るものがあった。

「……」

後悔しても、過去は変えられない。

考えていても時間の無駄なら、とにかく仕事を進めよう。

そう気持ちを割り切って仕事をしていると、運送業者から電話がかかってきた。

聞くとリーフブルワリーの荷物は、展示会が開催される隣の州の集荷場に届いているとのことだった。ありがたかったのは嬉しいが、アメリカの国土面積を考えると、頭が痛くなる。

しかもあちらの運送会社の社員は、日本企業ではありえない開き直りとも受け取れる態度で接し

てくるからいただけない。

——それでも、できる限りの手は尽くすべきだ。

とりあえず現地スタッフに途中まで取りに行けるかを確認し、運送会社に中継地点まで至急届けてもらえるよう交渉した。

最初は渋っていた相手方だが、荷物が所定の時間までに届かなかった際には損害賠償請求も視野に入れた話し合いになる、と脅しを含めた交渉の末、こちらの意見を呑んでくれた。

その交渉をしながら、瑞穂はネットで現地スタッフのためのレンタカーを手配する。

——現地に、新婚の吉田君がいてよかった。

アメリカに赴いて（おも）いるスタッフの一人が、新婚旅行の際に国際運転免許証を取得していた。こんな事態は想定していなかったが、運転できる者がいないか事前に確認しておいてよかった。

運送会社との話し合いを終え、そのままスタッフに電話をかけて段取りを伝える。

そして自分は荷物を受け取れるまで会社で待機しているので、なにかあればすぐに電話するように言い添えた。

デスクでホッと一息ついた時、自分の名前を呼ぶ甘い声が聞こえた。

「瑞穂、もう仕事終わる？」

声のした方へ顔を向けると、梨香が部署ごとを区切るための低いパーテーション越しに手招きしているのが見えた。

時計を確認すると、いつの間にか終業時間を過ぎていて、営業部のメンバーの中にも帰り支度を始めている者がいる。

普段の梨香は、帰る前にわざわざ挨拶（あいさつ）に来たりしない。

なにか用があるのだらうと思いつつ、手を軽く挙げ待つように指示をし、まずはオロオロしながら一連の流れを見守っていた部長に報告をした。

安堵の表情を見せる部長に、後は自分が対応するので部長は帰っても大丈夫だと伝え、梨香のもとに向かう。

「どうかした？」

帰り支度を始める人の邪魔にならないよう、オフィスの片隅に移動して聞くと、昼間話しかけられた時より幾分凝ったメイクをした梨香が、人懐（なつ）っこい笑顔で言う。

「合コン行かない？」

「……？ はい？」

「一人欠員が出ちゃったのよ」

最初、なにを言われているのかわからなかった瑞穂は、冷めた口調で返す。

「仕事があるから無理。それに、私が行っても、相手が喜ばないわよ」

「だからいいんじゃない」

梨香は、屈託（くつたく）のない笑みを添えて続ける。

「恋愛に興味のない瑞穂を連れて行けば、その分ライバルが一人減るってことでしょ」
「……」

「下手に友達と狙いが被ると、面倒な気遣いが生じるじゃない。でも瑞穂なら、その心配はないでしょ」

悪意がないだけにたちが悪い。眉間まげんを押さえつつ、瑞穂が言う。

「悪いけど……今トラブルが起きてて、まだ帰れないから」

「えー、そんなに仕事ばかりして、飽あきないの？」

その時、ふとあることを思い出す。

「そういえば梨香、昼間言ってた資料作りは終わったの？」

週明けのミーティングに向けて、アイディアをまとめるだけでなく、慶斗に資料を作るように言われたと話していたが。

瑞穂の問いかけに、梨香が首を横に振る。

「千賀観さん、センガホールディングスからの急な呼び出しがあつて、今日は戻らないみたいなのだから、月曜日の朝一ですれば間に合うから大丈夫」

樂觀的に話す梨香に、社会人としてそれでいいのかと問いたくなる。

「千賀観さんの気を引きたいなら、合コンをやめて、資料を仕上げておいたら？」

いくら従姉妹いとこでも残業の強要をするわけにはいかないの、やんわり提案してみた。でも梨香は、

それとこれとは別問題とばかりに首を横に振る。

「千賀観さんが、絶対結婚してくれるって言うなら仕事を頑張るけど、その保証がないうちは、全ての出合いを大事にしなきゃ。私たちもう二十八なのよ」

「……」

だから？ と、顔にでも書いてあったのだろう。

梨香が呆れた視線を向けてきた。

「そろそろ結婚しなきゃ痛いじゃない」

「そう……」

「あつ、瑞穂はいいのよ。パパも、瑞穂は結婚なんてしないで、ずっとウチで頑張つて欲しいって言ってるから」

「それは……どうも」

——梨香に悪気はないのだろうけど……

満面の笑みで言われても対応に困る。

そんな瑞穂の気持ちを察することなく、梨香が嬉しそうに続けた。

「瑞穂は子供の頃からしっかりしてたから、関係ないかもだけど。私みたいな普通の可愛いだけが取り柄えの女子にとって、結婚って重要な問題なのよ。この先の人生をよりよいものにするためには、仕事より出合いを大事にしないと」

二十八歳で、自分のことを「可愛いだけを取り柄えの女子」と表現するのは、痛くないのだろうか。そんな素朴な疑問が頭をよぎるが、言葉にすると面倒が増えそうなのでスルーしておく。

「……そう。リスクヘッジを欠かさないのは、社会人として大事なことね」
できればその危険予測能力を、仕事にも向けてくれ。心からそう願いつつ、梨香の背中を見送った。

梨香が帰った後、他の営業部のメンバーが一人、また一人と帰るのを見送りながら、一人で仕事をしているとき、平助がオフィスに入ってきた。

「瑞穂、梨香を知らんか？」

フロアに瑞穂以外の社員がいないことを確認して、平助が親しげな口調で話しかけてくる。

「だいぶ前に帰りましたよ」

瑞穂の言葉に眉を寄せた平助が、梨香のデスクを漁り出した。

「どうかしたんですか？」

ただならぬ平助の様子に、瑞穂も梨香のデスクに近づく。そんな瑞穂に平助が言う。

「今、千賀観さんから電話があったんだ。梨香に今日中にと頼んだ資料を取りに会社に寄りたいが、二時間ほど後に会社に寄っても鍵は開いているかと聞かれて……」

「あの子……」

デスクの上をめぼしい資料が見つからず、引きだしの中まで漁り始める平介の姿に、瑞穂が額ひたいを押さえる。

さつき合コンに誘いに来た梨香は、頼まれた資料を仕上げるのは月曜日で大丈夫だと言っていた。瑞穂がそのことを告げると、若干その展開を予想していたのか、平助が「やっぱり……」と、表情を強張こばらせる。

「梨香のことだから、そんなことじゃないかと思ったんだ……」

「それを承知していて、どうして、千賀観さんのサポートを梨香に任せたんですか？」

呆れつつ聞いてはみたが、その理由はわかっている。

平助は、あわよくば慶斗に梨香を気に入ってもらい、センガホールディングスと姻戚関係を結びたいからだ。

でも当の梨香がこれでは、慶斗が彼女を気に入るなんてことは難しいのではないかと思う。

諦めがつかないのか、平助が梨香のデスクを探し続けている。見かねた瑞穂も、ブックスタンドに差し込まれている書類を確認していく。

「頼まれた資料、これじゃないですか？」

『再開地区周辺の企業分布』『製作・梨香』と、表紙に印刷された資料を手取る。

表紙のすみにシャーペンで今日の日付と「メ」のサインが書き込まれているので、これで間違いないだろう。

——いくら社内にも栗城が多いからって、ファーストネームだけ書くって……

栗城の苗字を持つ者が三人いるので、瑞穂や梨香のことをファーストネームで呼ぶ者は多いが、提出書類にファーストネームを書くのはいかがなものかと思う。

そんなこと思いつつ書類の中身を確認すると、ほとんどなにもできていない。

梨香の能力を考慮すると、月曜日の朝急いでどうにかなる状態ではない気がした。

「たぶんこれだな」

内容を確認した平助が、一段と顔を強張こわばらせる。

「とりあえず千賀観さんに連絡して、資料ができてないから来ても無駄足になると伝えた方がいいんじゃないですか？」

瑞穂の提案に、平助が冗談じゃないと首を横に振る。

「そんなことして、ウチの評価が下がったらどうする。彼は、センガホールディングスの次期社長候補なんだぞ」

「でも、わざわざ来たのに、頼んであった書類ができてない方が、千賀観さんの心証は悪いんじゃないですか。ここは正直に伝えるべきです」

「……っ」

瑞穂の指摘に平助が下唇を噛む。彼は未練がましく資料を再読した後、瑞穂を見た。

「なんですか？」

「再開発地区の企業分布……って、営業の資料を使って、どうにかできないか？」

自分のパソコンの中にもまとめてある資料を思い出し、「できなくはないです」と、答える。

次の瞬間、平助が瑞穂の両肩を強く掴つかんだ。

「頼む。梨香の代わりに、今すぐこの資料を仕上げてくれ」

「——えっ？」

突然なにを言い出すのかと瑞穂は戸惑う。

「これ、梨香の仕事ですよ。勝手に私が仕上げるわけにはいかないし、そんなの誰のためにもならないじゃないですか」

ここで瑞穂が代わりに資料を仕上げては、梨香の責任感が育たないし、慶斗を騙だますことになる。瑞穂の正論を、平助が「会社のためになるっ！」と一刀両断した。

「このままでは、我が社の評価が下がってしまう。お前はそれでいいのか？」

「うっ……っ」

そう言われると、すぐに言葉を返せない。

センガホールディングスが、利益率の悪いクラブトビールからの撤退を考えているという噂は耳にしていた。これからも、リーフブルーのビールを広めていきたいと思っている瑞穂にとっても、出向一ヶ月少々で慶斗の心証を悪くする事態は避けたい。

チラリと自分のデスクに視線を向ける。

アメリカから、荷物を受け取ったという連絡はまだ来ていない。その連絡があるまでは帰るつもりはないのだが……

「梨香には、私からキツク注意しておくから、今回だけは助けてやってくれ」

瑞穂の迷いを察したように、平助が頭を下げてきた。

「七年前の悪夢を繰り返したくないんだ」

その言葉の意味するものを承知している瑞穂は、ため息を吐く。

「……今回、だけですよ」

そう念を押した瑞穂が手を差し出すと、平助の表情が輝きその手に梨香が残っていた資料を握らせた。

書類を預かった瑞穂は、すぐに自分のデスクに引き返しパソコンを開く。

——再開地区の企業分布……

それに関して瑞穂は、レイクタウンのリニューアル計画が確定する前から情報収集を続けていた。周辺環境が変われば、客層が変わり、商品の売れ筋も変わる。営業は、そういった変化には常に敏感であるべきだと考えているからだ。

営業としての職務をまっとうするべく収集してきた情報が、違う形で役に立つとは。

「……」

とりあえず梨香が途中まで準備していた資料に目を通し、瑞穂は大きなため息を吐く。

瑞穂が地道に蓄積してきた情報と、梨香が途中で作った資料ではあまりに違いすぎた。長い期間、継続的に情報収集をしてきた瑞穂には、梨香の資料が、広報がホームページで公開している再開発見通し計画案をそのまま書き写したものだと思われる。

——このままの資料じゃ、とても千賀観さんに渡せない。

梨香にも、梨香を任命した平助にも言いたいことは山ほどあるが、とりあえず今はこの資料を作るのが先だ。

梨香の作った資料をベースに情報を書き足せばいいと思っていたが、これでは最初から作り直さなくてはならない。

覚悟を決めた瑞穂は、パソコンに意識を集中させるのだった。

パソコンと向き合うこと約二時間。

どうにか資料を完成させ、表紙の書類制作者の名前を「梨香」から「栗城」に修正し、梨香のデスクの上に置く。

そして自分のデスクに戻り、中断していた自分の仕事を再開すると、慶斗がオフィスに入ってきた。

「こんな時間まで残業？」

瑞穂の存在に気付いた慶斗が、声をかけてくる。

「少しトラブルがあったもので」
軽い会釈を添えて、短く答える。

「そう」

梨香のデスクの書類を手にとった慶斗が瑞穂に視線を向け、「サポートは必要?」と確認してきた。

「いえ。私一人で処理できます。帰っていただいて大丈夫です」
連絡事項は端的に。

我ながら愛想のない返事だとは思いが、どう考えても向こうも仕事を抱えて忙しいはずだから、無駄な会話をしている暇があるのなら早く帰って休めばいいと思う。

「俺が手伝って早く終わるなら、遠慮しなくていい。週末なんだから、遊びに行きたいだろう?」
爽やかな口調で問い返す慶斗に、瑞穂は「週末は、関係ありません」と、そっけなく答える。

「これといって趣味もないので、急いで帰る必要はありませんから。帰ったところで、本を読むか、DVDを観る程度です」

だからお気遣いなく。そう肩をすくめる瑞穂に、何故か慶斗は痛々しいものを見るような視線を向けてくる。

「……若いんだからもっと楽しめよ」

「そういう発言は、セクハラになりますよ」

その手のアドバイスは、もう聞き飽きた。

なにに重きを置くかは人それぞれだろう。

プライベートを充実させるために仕事を頑張る人を否定はしないが、瑞穂は仕事を充実させるために、プライベートが稀薄になっても満足しているのだから、ほっといてももらいたい。

「それは失礼した」

プライベートにまで口出しされる筋合いはないと、冷めたい口調で返す瑞穂に、慶斗が謝罪してくる。

「……」

初めて会った時もそうだが、彼は他の男性なら不快な顔をしそうな瑞穂の物言いを、あっさりと受け流してしまう。

別に喧嘩したいわけではないので、引いてくれるならその方がいいのだが……

——なんか拍子抜けしてしまう。

「そういえば、二ヶ月ぶりだな」

「え?」

なにが……と、聞こうとした時、瑞穂のスマホが鳴った。アメリカの現地のスタッフからだ。

「すみません! もしもし……」

慶斗に断りを入れ、素早く電話に出る。その視線の先で、慶斗が瑞穂の作った資料に目を通し満

足げに表紙をポンッと叩くのが見えた。

その様子に内心で安堵しつつ、電話の向こう側に耳を傾ける。

「そう……無事に荷物受け取れた。よかった。気を付けて戻ってください」

瑞穂がホッと息を吐くと、資料を鞆かばんにしまった慶斗が軽く手を上げてオフィスを出て行くところだった。

「あ、社長が帰りに寄ってくださいって言っていました」

スマホを顔から遠ざけ、慌てて平助からの伝言を告げる瑞穂に、「伝え忘れたことにしてくれ」と、軽く手をヒラヒラさせる。

「どうして私が、貴方の嘘の片棒を担かがなきゃいけないんですか」

素早く抗議する瑞穂に、慶斗が驚いたように振り返る。

瑞穂の顔をまじまじと見つめる慶斗が、不意に表情を緩ゆるめどこかからかうように言った。

「二ヶ月前のお詫びだと思ってくれればいい」

「……っ！」

その言葉に、さつき彼の口にした「二ヶ月ぶり」の意味がわかった。三月のあの日以来、初めて彼と言葉を交わしたのだ。

気まずい表情を浮かべる瑞穂に、「じゃあ」と目を細め、慶斗が今度こそオフィスを出て行く。

その時、遠ざけたスマホから、スタツフが「もしもし」と繰り返す声が聞こえた。

◇ ◇ ◇
「ああ、ごめん。なんでもない」

この状況で、これ以上追いかけてどうする。そう結論つけた瑞穂は、あの王子様にはなるべく関わらないでおこうと、改めて心の中で誓うのだった。

慶斗と二ヶ月ぶりに言葉を交わした日から二週間後、青ざめた表情の梨香が瑞穂のもとに駆け込んできた。

「瑞穂、貴女ってば、大変なことをしてかしてくれたわねっ！」

「えっ？」

突然のことに戸惑う瑞穂の手を、梨香が強引く。

手を引かれるまま立ち上がった瑞穂は、「とにかく社長室まで来て」と、梨香に手を引かれて歩き出した。

いつもと違う梨香の様子に、なにかとんでもない問題でも起きたのかと背筋に冷たいものが走る。アメリカの展示会は、アクシデントがあったものの、まずまずの成果を出していた。現地での評判もよかったので、社長室に呼び出されるほどのクレームが入ると思えない。

「どこからのクレーム？」

自分の仕事をあれこれ思い出し、エレベーターに乗り込んだタイミングで聞いてみた。すると梨香が、緊張した顔で答える。

「千賀観さん」

「はい？」

「とにかくすぐ怒ってて、瑞穂のせいで酷い損害を生じさせるとこだったって言うのよ」

これまで二回しか言葉を交わしたことの無い慶斗を、何故それほど怒らせたのかわからない。

「損害？ どの件に関して？」

「とにかく、ちゃんと私の代わりに謝ってよ」

——え？ 梨香の代わり？

その言葉が引っかかるが、それについて質問をするより早くエレベーターが十一階に着いてしまった。すぐに梨香が、また瑞穂の手を引き歩き出す。

彼女はそのまま社長室の扉を開けると、瑞穂の背中に手を回して自分の前に押し出した。

「……っ」

勢いよく背中を押された瑞穂は、よろけてその場にしゃがみ込む。土下座に近い姿勢で顔を上げると、来客用のソファアに座る慶斗と目が合った。

長い足を持って余すように組んでソファアに座る彼は、眉間に皺みけんしわを寄せ厳しい表情を浮かべている。端正な顔立ちをしている彼のそんな表情には、周囲を黙らせる威圧感がある。

実際、慶斗の座るソファアの向かいには、平助が小さく縮こまって座っていた。

「……」

社長室に満ちるただならぬ緊迫感に、瑞穂は立ち上がることもできずに息を呑んだ。すると瑞穂の背後で、梨香が頭を下げる。

「すみませんっ！ これまで書類を作ってたの、実はこの子なんです」

「……はい？」

どういうことだろうと後ろに視線を向けると、姿勢を戻した梨香が目を潤うるませながら口を開く。

「千賀観さんに頼まれた書類、ちよつとアドバイスをもらおうと相談したら、この子が勝手に全部仕上げちゃって、それをどうしても使って欲しいって頼んでくるから……」

つらつらと言いつつ、梨香の話聞きながら、瑞穂は思い切り眉を寄せた。

二週間前、頼まれた仕事を放って帰った梨香に代わり、瑞穂が書類を仕上げたことがあった。

後日、慶斗から絶賛されたとはしゃぐ梨香は、それに味をしめ、書類作成を全て瑞穂に丸投げしてきた。

瑞穂は何度も、アドバイスはするが自分で作るように言ったのだが、梨香は「私じゃ無理」と、堂々と聞き直り、まったく聞き取らなかつた。

最初に今回だけと約束した平助まで、「会社のために」「商品の知名度を上げ、販売実績つひなに繋げるために」と泣き付いてきたのだ。

社の知名度を上げ、販売実績に繋がりたいというのは瑞穂の願いでもある。仕方なく、これも営業の仕事の一環と割り切って、書類作成を続けていたのだが……

梨香はその経緯をなかつたことにして、瑞穂が出しゃばり、強引に彼女の仕事を奪ったことのようにしている。

さすがに納得のいかない顔をする瑞穂を見据え、慶斗が大きく頷いた。

「なるほど、君の仕事だったのか」

大きく息を吐いた慶斗は、前髪を掻き上げて平助を睨んだ。

「これは一体どういうことですか？ 私のサポートスタッフは、栗城社長の娘である栗城梨香さんと伺っていたので、彼女に資料作成を頼んでいたのですが。今頃になって資料は彼女が作ったものではないと言ひ出した。貴方は……私を騙して楽しんでるんですか？」

「いや……、決して千賀観さんを騙そうなどということはなく。彼女の苗字も栗城なので、制作者の名前が同じなのは……そういうことで……」

しどろもどろに話す平助に痺れを切らしたのか、慶斗は立ち上がり瑞穂の前で書類を手に仁王立ちする。

「随分デタラメな仕事をしてくれるね」

怒りを含んだ慶斗の声に、平助がさらに縮こまる。だけど瑞穂としては、彼のその言葉に納得がいかない。

「デタラメな仕事をしたつもりはありません」

真つ直ぐ見上げ、そう断言する。そんな瑞穂に、慶斗が小さく笑って手を差し伸べる。

「だからこそ、間違っている。……立てるか？」

言いながら、慶斗が手を軽く揺らす。そうされることで、自分が床に座り込んだままだったことに思い至った。

「一人で立てます」

差し出された手を無視して自分の力で立ち上がる瑞穂が、もう一度宣言する。

「リーフルワリーの社員として、社に損害を与えるような仕事はしていません」

ソファアで青くなる平助は、事情を説明することなく「本当に申し訳ありません」と、深く頭を下げるばかりだ。

「では何故、自分で作った資料の責任を従姉妹に押しつけた？」

随分な物言いに、瑞穂は眉を寄せる。

「そんなつもりはありません。仕事を依頼されたのが栗城梨香だったので、彼女が書類を提出しただけです。もし書類に不備があった場合は、私が責任を負う覚悟はありました」

まるで瑞穂が、梨香の名前で提出する資料だから適当な仕事をし、責任逃れをしているような言い方にカチンとくる。

仕事を丸投げしておいて、その責任を瑞穂一人に押しつけてくる梨香や、萎縮するばかりで事情

を説明してくれない平助にも腹が立った。

そんな二人に話を合わせて、慶斗の怒りを静める手助けをする気にはなれないので、瑞穂は自分の意見を遠慮なく言葉にする。

「それにお言葉を返すようですが、この二週間、千賀観さんが彼女に頼む資料はどれも急なわりに難解で、参考資料を分析するだけでも相当な時間を要します。それをたて続けに頼むのは、作り手に対する配慮が欠けているのではないのでしょうか」

瑞穂が資料作りを引き受けざるをえなかった理由は、そこにもある。

慶斗が梨香に依頼した仕事は、どれも締切までの期間が短く深い知識を求められるものばかりで、とても彼女の手に負えるようなものではなかった。

補佐役を任されている以上、それはそれで問題があるが、本人の能力に見合わない仕事を無茶振りし続ける慶斗にも問題を感じる。

「そうかな？」

「はい。負担が多すぎます。センガホールディングスの本社では、社員数が多いのでその仕事の仕方が通ったのでしょうか。もしくは創業者一族の命令なら、社員が無理をしても進行したのかもかもしれませんが、ここはセンガホールディングス本社ではなく、系列子会社のリーフブルワリーです。

社員数の少ない弊社で、蛇口を捻れば必ず水が出てくると決めつけているような仕事の振り方がまかり通ると思われては困ります」

呼吸ができてきているのか心配になるくらい顔色の悪い平助には悪いが、慶斗がまだしばらくリーフブルワリーで働くのであれば、それは理解しておいてもらいたい。

瑞穂の言葉に承知したと頷く慶斗が、彼女をじっと見る。

「でも君は期限内で仕上げた。その間、自分の仕事はどうしていた？」

「私には営業として培ってきた知識がありましたから。自分の仕事は、同時進行で進めていました」

おかげで、ここしばらくは残業続きだ。

「なるほど」

手にした書類に視線を落とした慶斗が、再び瑞穂へと視線を向けてくる。

力量を値踏みしているような視線に居心地の悪さを感じながらも、瑞穂は慶斗に確認する。

「それで、その書類のどこに不備があったと？」

経緯はどうであれ、求められた資料はどれもきっちり仕上げたつもりだった。だが、依頼主が不備があると言うのなら、それは非を認め謝罪するべきだろう。

そんな瑞穂に、慶斗が逆に問う。

「君は、なにが間違っていたと思う？」

「わかりません。自分では、きちんと仕上げたと思っていました」

「そうだな。よくできた資料だ。わざと間違えておいた数値もきちんと修正してある」

「はい？」

彼は、書類に不備があつて怒っているのではないのか。

拍子抜けする瑞穂をからかうように肩をすくめた慶斗は、表情を厳しくして平助を睨む。

「出向が決まった際、社長は私に『優秀なスタッフを付ける』と仰いましたが、それは聞き間違いだっただけでしょうか？ もしかして社長は、私が派閥争いに破れることを望んでいるとか？ それならこちらにも、いろいろ考えを改める必要がありますが」

——派閥争い？

瑞穂にはなんのことだかわからないが、平助はその言葉に過剰なまでの反応を見せる。

「いえっ！ けっ、決してそのようなことは……。千賀観さんの邪魔をするなど滅相もない。資料の件に関しては、本当に二人の苗字が同じだった故生じた不手際で……」

必死に言い訳する平助に、慶斗が険しい表情のまま「なるほど」と、頷いた。

「栗城社長の言い分はわかりました。確かに、彼女も栗城だ。つまり、こういうことでしょうか？」

もったいつけるように一度言葉を切った慶斗は、手にしていた資料を軽く叩いて言葉を続ける。

「私は、栗城梨香君に資料の作成を依頼したつもりだったが、彼女は自分の従姉妹である栗城瑞穂君が依頼されたと勘違いし、彼女に仕事を任せました。任せられた瑞穂君は、営業で培ったノウハウがある自分こそこの仕事に適任だと思ひ資料を作成した」

「はあ……」

「栗城瑞穂君の能力を承知している社長も、彼女が私の仕事をしていることに疑問を抱かなかつた。……そういうことですか？」

「え……まあ……」

それが事実ではないと承知しているが、そういうことで収めようではないか。そう言いたげに微笑む慶斗に、平助がぎこちなく首を動かす。

すると慶斗は、さっきまでの厳しい表情を一変させた。

「私はずっと、栗城梨香さんが社長の仰る有能なスタッフだと思っていました。それは私の勘違いで、本当は栗城瑞穂さんがスタッフだった。……そういうことでよろしいですね」

「はい？」

話が妙な方向に転がっていく。

素っ頓狂な声を上げる瑞穂をチラリと見て、慶斗は強気に微笑む。

「私のスタッフは、最初から栗城瑞穂さんの方だった。そういうことですね？」

強く念を押された平助が、首をぎこちなく縦に動かす。

「はあ……まあ……そのとおりです」

平助の答えに、慶斗が満足げに微笑んだ。同じ人物の笑顔とは思えない、その表情の変わり方が見事で、彼が自分の見せ方を熟知しているのだと察せられる。

「なるほど。そういうことでしたか。安心しました。ではこれからよろしく頼む」